

立地場所の異なる住区基幹公園の利用者の意識構造の相違性に関する研究*

A Study on Differential Characteristics of User's Consciousness Structure

Between Each Nucleus Park in Residential Area *

松下 直文** , 岩崎 義一**

By Naofumi MATSUSHITA** and Yoshikazu IWASAKI***

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

近年、商業・業務地域等の昼間人口が多く夜間人口が少ない地域において、都市住民、従業者、来訪者などの休息、集い、交流などを考慮した都市公園の整備に対する必要性が高まっている¹⁾。このような地域においては、個人の行動範囲、行動パターン、目的は様々であることから、各個人レベルの意識を考慮した都市公園の整備が必要であると考えられる。そのためには、公園利用者がある目的地へ向かう途中、時間的余裕のある場合に公園に寄り道をする(以下“ついで利用”という。)時、当該公園を選択した要因を明確にする必要がある。このことは、都市公園制度においても、同様のニーズに応えるため市街地中心部における「広場公園」の設置の必要性として述べられている²⁾。この考え方を住区基幹公園整備にまで広げて反映させていくことは都市計画の重要な課題と考える。

本研究は、立地場所の異なる住区基幹公園に対して“ついで利用”の実態と利用者の公園利用における意識構造特性を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究方法

大阪市内には住区基幹公園 875ヶ所(平成11年3月現在)が配置されており、また高架下の公園は阪神高速道路、JR鉄道などの高架に12ヶ所配置されている³⁾。本研究では、大阪市内における商業地区から中大江公園(中央区)、住居地区から友洲中央公園(都島区)、高架下の公園から加島小公園(淀川区)、

大宮北公園(旭区)の4箇所を対象公園として取り上げ(図1)、また、利用者の意識構造を明らかにするためにアンケート調査(ヒアリング形式)を行った。調査は平日と日曜日とを行い、対象者はアンケート調査時間内の利用者とした(表1)。

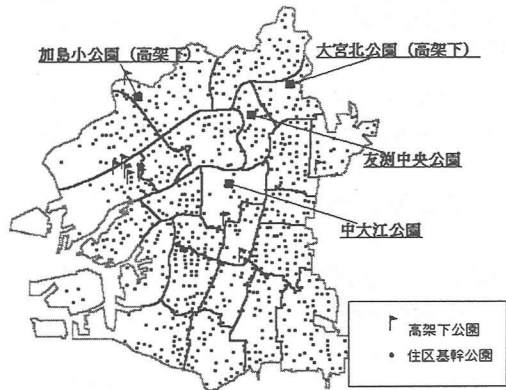


図1 住区基幹公園の分布と研究対象公園

表1 調査概要

公園名	中大江公園	友洲中央公園	加島小公園	大宮北公園
				
所在地	大阪市中央区	大阪市都島区	大阪市淀川区	大阪市旭区
開園年月日	37.10.15	57.3.31	44.3.14	61.4.1
面積(㎡)	10,590	19,000	6,056	1,525
調査概要	1999/11/20~11/30 AM10:00~AM18:00(平日・日曜日)			
対象者	調査日の公園利用者			
票数	平日72名/日曜日30名	平日50名/日曜日28名	各30名	各30名

2. 対象公園の所在地地区の特性

中大江公園が所在する大阪市中央区の大部分は商業地域となっており、昼夜間人口比は10.9と大きい値を示している。従業者人口のみみると、サービス業が主とされる第三次産業が大部分を占めている。また、友洲中央公園が所在する大阪市都島区の大部分は第一種住居地域となっており、昼夜間人口比は1.06と差はあまり見られない。また、加島小公園が所在する大阪市淀川区は準工業地域と工業地域で大半を占めてお

*キーワード: 住区基幹公園、ついで利用、主成分分析

**学生員 大阪工業大学大学院工学研究科土木工学専攻

***正会員 工博 大阪工業大学工学部土木工学科

〒535-8585 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL.(06)6954-4109 FAX.(06)6957-2131

E-mail: m1100113@eng.oit.ac.jp

り、昼夜間人口比は 1.39 と差はあまり見られない。また、大宮北公園が所在する大阪市旭区は第一種住居地域と第二種中高層住居専用地域で大半を占めており、昼夜間人口比は 0.89 と昼間人口の方が低い(図2,図3)。

このように、中大江公園は商業・業務地区、友洲中央公園及び大宮北公園は居住地区、加島小公園は居住地区を中心とする多機能の混在地区とにそれぞれ立地し、地区の特性は異なる。



(平成 10 年大阪統計書)

図2 区別昼夜間人口



(平成 8 年工業統計)

図3 区別産業別従業者人口

3. 対象公園の“ついで利用”実態の特性

対象公園における“ついで利用”の実態をついで利用者の目的地、公園利用理由について見てみる。

(1) 中大江公園

平日の“ついで利用”は、全体の 83%を占めており、主として会社員が職場へ行くついでに利用している。公園利用理由として「ベンチの使用」、「トイレの使用」などが主であった。また、日曜日の“ついで利用”は、全体の 78%を占めており、主として高校生、大学生の層がショッピングセンターなどの小売店の行く途中に利用している。また、公園利用理由として「ベンチの使用」、「トイレの使用」が主であった。

(2) 大宮北公園

平日の“ついで利用”は、全体の 60%を占めており、主として大学生が大学へ行く途中や主婦、小学生以下の子どもが自宅へ帰る途中に利用している。また、公園利用理由として「ベンチの使用」や「遊戯具(ブランコ、すべり台など)の使用」が主であった。日曜日の“ついで利用”は、全体の 22%を占めており、主として無職(高齢者)、主婦、小学生以下の子どもが自宅へ帰る途中に利用している。また、公園利用理由として「遊戯具(ブランコ、すべり台)の使用」や「ベンチの使用」が主であった。

(3) 友洲中央公園

平日の“ついで利用”は、全体の 30%を占めており、主として主婦、無職(高齢者)、小学生以下の子どもが自宅への帰る途中に利用している。また、日曜日の“ついで利用”は、全体の 23%を占めており、主として、主婦、無職(高齢者)、小学生以下の子どもが自宅への帰り道に利用している。また、ついで利用者の公園利用理由として、平日、日曜日共に「トイレの使用」や「遊戯具(すべり台・ブランコなど)の使用」が主であった。

(4) 加島小公園

平日の“ついで利用”は、全体の 30%を占めており、主として主婦、小学生以下の子どもが自宅へ帰る途中で利用している。日曜日の“ついで利用”は、全体の 28%を占めており、主として主婦、小学生以下の子どもが自宅へ帰る途中で利用している。また、公園の利用理由として、平日、日曜日と共に「公園内を通ると車が通らないから安全」が主であった。

このように、中大江公園、大宮北公園といった周辺にオフィス、大学など不特定かつ多数の人が利用する施設が存在する場合、“ついで利用”の割合が高い。また、居住地区で、周辺に不特定かつ多数の人が利用する施設が存在しない友洲中央公園、加島小公園は、“ついで利用”の割合が低ことがわかる(図4,図5)。

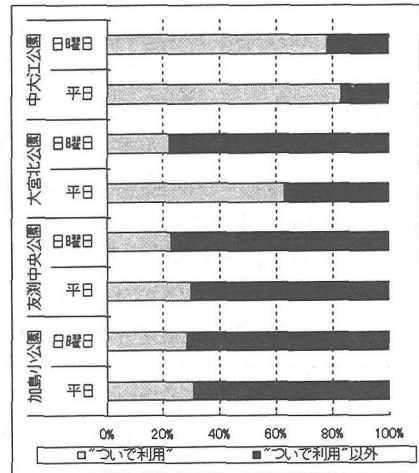


図4 各公園における“ついで利用”の構成比

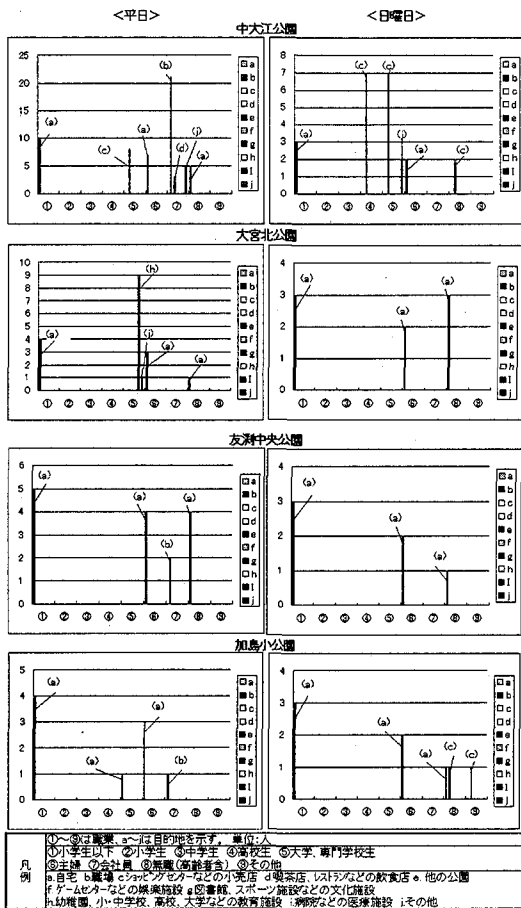


図5 各公園におけるついで利用者の目的地

4. 対象公園における利用者の空間イメージ評価

本章では、対象公園のイメージを「明るさ」や「安全さ」「広さ」など13の要素を5段階のランクに分けたものにそれぞれ回答してもらい、この値を用いて主成分分析を試みた⁴⁾。累積寄与率はすべてにおいて50%～60%の値であった(図6)。

(1) 中大江公園

分析の結果、固有ベクトルから第一主成分は「のびのび」、「すっきり」、「親しみやすさ」などがプラス要因で大きく、「派手」、「安全」、「きれい」などはプラスでも小さい値であることから自然的から人工的までの空間イメージを表す軸と考えられる。第二主成分は「明るさ」、「落ち着いた」、「安全」などがプラスの要因で大きく、「賑やかさ」、「派手」、「洒落た」がマイナスで大きいことから、日常的から非日常的ま

での空間イメージを表す軸と考えられる。こうした軸がイメージされる中で、これを利用頻度別に得点を付置すると図6のようになっており、特徴が見られなかった。これは近くにあるから行くという考え方が多いと考えられる。

(2) 大宮北公園

第一主成分は「広さ」、「親しみやすさ」、「景色の良さ」などがプラスの要因で大きく、「すっきり」、「にぎやか」、「派手」などがマイナスの要因で大きいことから「人けの程度」を表す軸と考えられる。第二主成分は「新しい」、「にぎやか」、「派手」などがプラスの要因で大きく、「広さ」、「親しみやすさ」、「落ち着いた」などがマイナスの要因で大きいことからこれも第一軸と同じ「人けの程度」を表す軸と考えられる。また、第一軸で利用頻度に分類される傾向があり、利用頻度が高い人は人けの多さを強く意識していると考えられる。

(3) 友洲中央公園

第一主成分は「明るさ」、「景色の悪さ」、「ごちゃごちゃ」などがプラス要因で大きく、「洒落た」、「賑やかさ」などはプラスでも小さい値であることから「施設整備の充実度」を表す軸と考えられる。第二主成分は「広さ」、「洒落た」、「派手さ」などがプラスの要因で大きく、「すっきり」、「安全」、「きれい」などがマイナス要因で大きいことから第一軸と同じ「施設整備の充実度」を表す軸と考えられる。また、第二軸で利用頻度が分類される傾向があり、利用頻度が高い人は公園の衛生、周辺交通、治安などから公園の魅力を感じるという意識が強いと考えられる。

(4) 加島小公園

第一主成分は「のびのび」、「明るさ」、「親しみやすさ」などでプラス要因が大きく、「落ち着いた」、「派手」、「すっきり」などがマイナス要因で大きいことから公園に対する「身近さ」の程度を表す軸と考えられる。第二主成分は「広さ」、「落ち着いた」、「のびのび」などがプラス要因で大きく、「明るい」、「新しい」、「きれい」などがマイナス要因で大きいことから「広がり」の程度を表す軸と考えられる。また、第一軸で利用頻度が分類される傾向があり、利用頻度の高い人は、公園が身近な存在であるか否かを強く意識していると考えられる。

このように、「ついで利用」の割合が高い中大江公

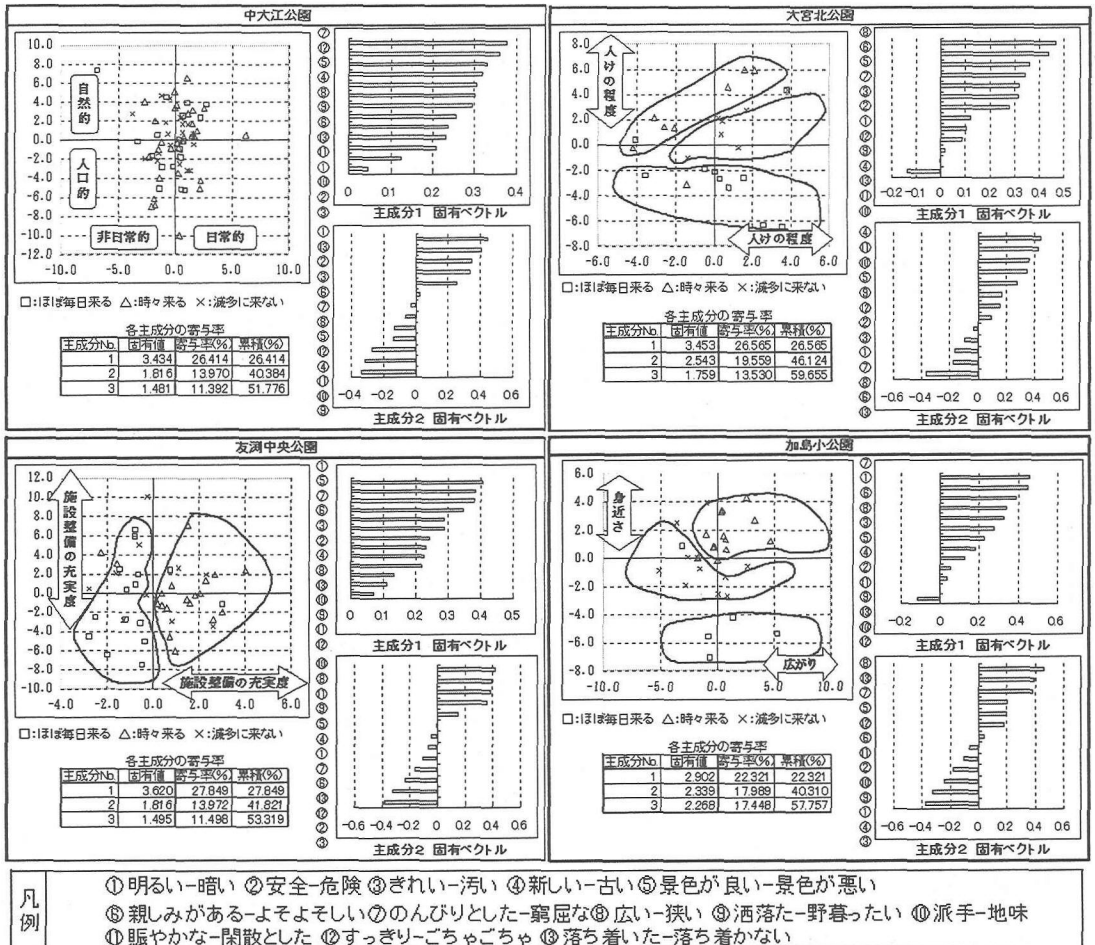


図6 各公園における主成分1,2軸の固有ベクトル値及びサンプル分布

園、大宮北公園の利用者は、公園の自然や人けの存在などの要因が強く反映する形で利用する傾向が強く、公園設備などは殆ど反映されていない。一方、“ついで利用”の低い友淵中央公園、加島小公園は、施設の充実度や広がりといった公園内設備の充実の程度が公園利用に反映していることがわかる。

5. まとめ

以上の分析により以下の点を明らかにした。

- ① 不特定かつ多数の利用者が利用する都心部の公園は、居住地区の公園と比べて、“ついで利用”の割合がかなり高い。
- ② 都心部の公園の利用者は、公園の自然や人けの存在などの要因が強く反映する形で利用する傾向が強く、

また、居住地区の公園の利用者は施設の充実度や広がりなど施設充実度の程度が公園利用に反映している。

以上のことから、“ついで利用”が多い都心部の公園では自然や人けの存在などの要素を積極的に取り入れ、表現できるものに計画することで、より多くの利用者に満足の高い利用を供することが出来ると考えられる。これら都心部公園の具備することが望ましい条件が、公園選択の要因としてどの程度重要性を有しているか、今後研究の課題としたい。

<参考文献>

- 1) 2) 改正都市公園制度 Q&A ぎょうせい (1997)
- 3) 都市公園一覧表 大阪市公園局 (1999)
- 4) 菅 民郎「アンケートデータの分析」現代数学社 (1998)